

『アリストテレスにおける正義と親愛について』

田 中 誠

はじめに

ギリシアのアリストテレスは、あらゆる事柄に興味を示したまさに万学の祖とされるにふさわしい大哲学者であった。彼の研究範囲はものすごく広くそしてその内容はものすごく深くてまさに超人的である。彼の著作は普通次の五つに分けられると言う。①「オルガノン」の名のもとに知られる論理学論集、②「形而上学」と題された第一哲学に関する論文集、③自然に関する著作集、④生物学的著作集、⑤人間に関することどもの哲学である道徳的および政治的著作集。この中の⑤がさし当たっての私の関心事であるが、これは倫理学、政治学、経済学などの言わゆる今日の人文、社会科学の分野での著作である。その中の道徳に関する彼の著作には「エウデモス倫理学」、「大道徳学」、「ニコマコス倫理学」があるが、その中の「エウデモス倫理学」についてはグラントやバーネットの説のようにアリストテレス本人のものではないと言う考えも有力であるし、「大道徳学」についても後世のものであると言う考えもあってアリストテレスのものかどうか疑わしい。ただ「ニコマコス倫理学」だけはアリストテレスの著作であることは確かなようであるし、しかもその内容が充実している。従ってアリストテレスにおける道徳の考えについては「ニコマコス倫理学」を読むことによってかなり明らかにされるように思われるのである。

倫理学の古典である「ニコマコス倫理学」は全十巻から成る大作である。その第一巻が総論であり

第二卷から第五卷までが人柄としての器量、第七卷が抑制と無抑制・快樂について、第八卷が愛について、第九卷が自愛、友の必要、第十卷が快樂について・幸福について、となっている。

この論文では総論の部分を含体的に少し見た後、正義と親愛がアリストテレス倫理学のキーワードであるように思われるので、その事について考える事でアリストテレス倫理学の一端にふれていてみようとするのである。

1 総論

アリストテレスにとって善く生きること、幸福に生きることが生きる目標であった。彼にとって倫理学と政治学とは一つであり前者は後者の一部であった。倫理学とはギリシア語で「性格に関することども」と言う意味である。もし人が政治的なことどもにおいて行為的であろうとするならば、その性格が善良でなければいけない。それ故に性格に関する研究は、政治学の部分でありかつはじめである。

彼の倫理学はポリス市民の倫理学であり、彼の政治学はポリス市民の政治学であった。ポリスの目的は善く生きることであるがさまざまな団体もこの目的のためにあるのである。

ポリスの中でこそ人は幸福にそして立派に生きることが出来るのである。「ニコマコス倫理学」では善い人間になるために必要な知識が研究されるのであるし、「政治学」では善い人間になるために必要な実践的方法が研究されるのである。ところで善とは、結局は幸福であると言う事であるけれども最高の幸福は観想的の生活に至るまでに必要なものとして、習慣と中庸と言うものがあるのでそれについて次に述べる。

倫理的と言う言葉は先に述べたように性格と言う事であり、これは習慣と言う語に由来する。性格

は習慣により形成されるのである。

ところである存在者が習慣を形成しうると言うことは、その存在者のあり方が自然必然的には決定されていまいと云うことを含意している。つまり自然を超え出た面を持たない限り習慣は不可能である。単なる自然的な存在者は、これを逆の方向にコントロールし、習慣化する事は出来ないのである。しかし、一方習慣として形成された徳は自然に反するものではないので、それはつまりは自由と素質との微妙な交点にあると言っていると思う。

さらに習慣の形成には活動が先行するのであって、正しい行為によって正しい人になるのである。そして最初の根源的な行為に正しさと言う性質を、付与するものが理性であると言っているのである。人間は原初、パトスの流れに動揺する無秩序で無抑制な存在者であった。この人間がやがて理性の力によって、次第に一定の行為能力を発揮しうる人間に変化してゆくのであるが、その事がつまりは習慣形成がなされたと言うことにはかならない。

習慣によって形成された人間、それはまさに中庸の徳を備えた人間であると言ってもよい。

「すべて知識のある人は過度と不足を避けて中間を求めこれを選びとるものである。」

もっともここで中間というのは物事の中間、例えば十個と二個との中間は六個であるということではない。われわれが中間というのは、例えば運動選手にとって適度の食事の量もふつうの人には多すぎないように、各人にとつての中間があるということである。そこで人間の知識がその仕事をよく仕上げる事が出来るのは、このような中間を求めてこれに向かつてその仕事を導いて行くことによってである。われわれは、常に完成された作品には削除したり付加したりすべきなものもないといっている。それは過度であつても不足であつてもよさを傷つけるもので、ただ中間だけがそのよさを保つという意味なのである。そして実際にすぐれた技術家は、われわれのいうこの中間を見つめなが

らその仕事を仕上げてゆく。ところが、徳はいかなる技術よりも正確でよいものであるから当然中間を目ざすものでなくてはならない。さて徳は感情と行為とに関わるものであるが、これらの感情や行為において過度と不足はあやまちとされるに反し、中間は賞賛され正当なものとされる。したがって、徳は一種の中庸として中間を目ざしているものである。」（ニコマコス倫理学第二卷六章）

中庸は極頂であると言ってもいい。中庸を備えた人間こそ私達が目ざす人間なのである。（なお中庸については、仏教も儒教もこれを説いているのであるが、今は一切省略する。）習慣によって中庸の徳を身につけるに至った人間は、最高善である幸福＝観想的生活が出来るようになった人間である。

観想的生活とは理性の固有の徳に即しての活動である。理性の関わるものは、認識されるものの最高であり、もっとも連続的なものでもあり得る。また、知恵に即しての活動こそが最も快適であるし自足的でもある。理性の活動は、活動それ自身以外の目的を追求せず、その固有の快樂がそこに内蔵されている。この活動は、幸福な人に必要とされるあらゆる条件を備えていると言っている。そうだとすれば人間の究極的な幸福とは、理性の固有の徳に即しての活動であると言っている。幸福は外的な善をも明らかに必要とするものであろう。生まれのよさ、子宝の恵み、健康など……。しかし、それらを越える理性の力こそが真の幸福を可能にするものであると言っているように思うのである。人間の幸福は、神の存在への可能なかぎりでの接近模倣であると言っている。神の活動が人間の幸福の原型である。神は世界の形相因であり目的因である。究極の幸福とは、神の観想であり宇宙の中に神を見ると言う意味での宇宙の観想なのである。

「浄福な者もまた共に生きることを望むものである。なぜなら孤独者であることは浄福なる者にもっとも相応しくないからである。」（ニコマコス倫理学第九卷九章）

アリストテレスにとって習慣は、人間形成のための大切な土台であった。それは中庸の徳を備えた

人間をめざすものである。中庸の徳を備えた人間は、幸福な人間である。そして、観想的生活の出来る人間こそが最高に幸福な人間である。それは、理想的な魂の活動から生まれる生活であるけれども、神の存在への可能なかぎりでの接近模倣である。しかし、そのような活動は人間の共同生活を否定することにはならない。人間は共に生きることが望むものである。人間はポリスの動物なのである。しかも、人間はそれぞれが個性を持った個物である。個別的なものの中にこそエイドスがあるのである。そのような個が集まって出来る共同体、そのポリスと言う共同体なしで最高の幸福はあり得ないのである。

ところで、このポリスと言うものを維持する上で必要な徳とは一体何であろうか。アリストテレスは、それを正義と親愛であるとしているのである。そこで、これからこの正義と親愛についてアリストテレスの言っているところを、少しまとめてみたいと思うのである。

2 正義について

人間は本質的にポリスを形成し、その中に住むものである。その際共同体の維持は法の確立とその遵守によって可能になる。そして法律とは、正義の原理によって保持実現されるものである。法とは、一般に有徳な行為を命じ悪徳の行為を禁じる。そのような法が共同体を維持発展させるのである。それはまさに他者との関係の中で、徳を活動させると言う意味の徳にもとづいた法であると言っている。正義とは、人と人との関連において実現される価値である。正義とは公平、公正、均衡、客観性と言った属性を有する一つの徳目であり、人間が人との関係の中で、たえず実現してゆかなければいけない価値なのである。

東洋では、家族が社会の基本単位であり、家族の中心は父母であるからそこでは忠孝の徳が重んじ

られた。それに対し西洋では個人が中心である。ここでは個人が単位になり、個人と個人の結びつきから社会がつくられ、国家が成立するのだから、個人間の公平な関係を規正する正義が第一義を占めると言っているように思うのである。

ところで、狭い意味での正義と言うものを分けてゆくとそれは分配的正義、匡正的正義、交換的正義の三つに分けられると、アリストテレスは言っている。

○分配的正義↓名譽、財貨、その他のボリス的共同体の成員の間で分割されるものの正義、それが分配における正義である。国家共有の財貨、たとえば市民が陪審員として奉仕したときの報酬、外国から輸入した穀物の分配、土地の分配等々が分配の対象になると言う。正義とはなんらかの平等である。そして平等とは過大と過小の中間である。正義とは人と人との関係において成立するものであるから二つの項が要求され、さらにまた事物においても二つの項が要求される。結局四つの項が要求される事になる。分配における正義はなんらかの価値にしたがって成立せねばならない。平等とは、人それぞれがその価値に従って取得する「比率の等しさ」であると言ってもいい。ただし違った種類の価値の比率をどう考えるかと言う事は、依然としてはっきりしない事であると言っている。

○匡正的正義↓人と人との関係において何か平等が犯されたとき、その結果生じた不平等な事態を平等な事態へと復元する原理が匡正的正義である。人と人との関わり合いには随意的な場合もあれば不随意的な場合もある。随意的な場合とは売却、購入、貸与などでありこれが後に契約違反が生じた場合にこれを回復するのが匡正的正義である。不随意的な場合とは、窃盜、暴行、殺人などでありこれをもとに回復しようとするのが匡正的正義なのである。これらの場合、人間の価値を勘定に入れないといけない。立派な人が劣悪な人をだまして金をまき上げて、その逆に劣悪な人が立派な人になんかしたことをしても事態は全く同じなのである。法律はすべての人を平等な者と見なし、ただ害

悪の程度にのみ注目する。それが裁判官の務めである。利得と損失の中間が匡正的正義である。それは要するに算術的比例に従ったものでなければいけない。裁判官の天秤がこの正義を象徴するのである。裁判官とは二分する人である。中をめざす人である。裁判官は加害や被害を量化して測定し、この量化測定された処罰を加害者に加えることによって、平等を実現しようとするのである。勿論実際は他人から損害を与えられた場合、それと同じ損害を相手に与えて報復するよりも自分が蒙った損害の補償を求めると言うやり方が合理的であるし、「目には目を」と言う部分と補償の部分の総合と言う事が行われているかのように思われるのである。

○交換的正義↓共同体の成立に先行し共同体を構成するための必須の条件、それが交換的正義である。生きる者としての人間どうしを、相互に結合しているものは何か。それは必要である。すべてを結合するものは必要である。人間は一人では自足しておらず、多くのものを欠いている。相互に欠けるところのある人々が、互助者として一つの居住地に集まる。

これがポリスである。共同体は、二人の医者から生ずると言うよりは医者と農夫から、一般的に言えば異なった等しからざる者たちの間から、生ずると考えるべきである。異なった価値の諸作品が、なんらかの仕方で等価にされなければいけない。量や質のはなはだしく異なった諸産物が、等価値化されるときそれらを測る一つの共通な尺度が必要であるが、この尺度のもとになるのが需要を基礎にして成り立っていると云っていい。

客観的な基準を外部に求めてゆくと、それは結局貨幣と言う事になろう。そして等価性を認めるような交換比率を、決定する事が実は大切である。適当な競争の状態で決まる価格が、市場価格であり公正価格であるが、これを売買契約の基準として尊重するというのは、合理的な態度であると言える。

現代社会における経済の動きは、全て交換的正義にもとづいていると言ってもいいのである。また交換的正義を確保するために、「公正取引委員会」のようなものも設けられているし、民法や商法があり民事訴訟法もあると言っているのだからである。

以上、正義についていろいろと述べて来たが、そのような正義がボリスの中で実現されてゆく事が、ますます大切になって来ているのである。

3 親愛について

社会国家が健全な発達をとげるためには、人と人との間柄が正しい関係におかれるのみでなく、同時に人々は互いに親愛的でもなければいけない。親愛は社会構成の感情的紐帯だからである。親しき人々を持たなければ人生は生きるに値しないし、親友を持つことがまさに人生の喜びなのである。

「幸福な人は、自然の本性に従ったさまざまな善いものを所有しているが、このような人は、友や高尚な人と共に暮らすことの方が、あかの他人やありきたりの人と暮らすよりも明らかにすぐれている。それゆえ幸福な人は友を必要とする。」（ニコマコス倫理学第九卷十一章）

愛する者がいれば、人間はどのような不幸にも耐えることができる。愛は人間の本性に根ざし人間の本質をあらわす。愛は行為もしくは創造という試練を通してのみ可能になる。

愛は究極の価値であり、正義を溶解する。愛の人こそが真の人間である。

愛とは愛されるべきもの、すなわち善いもの、快いもの、有用なものを対象とする。愛は相互的である。愛は一方的な働きかけとしては成立せず、必ず相手からの主体的な応答をまって初めて成立する。呼びかけに応じてくれないければ愛は存在し得ない。愛とは、お互いが相手の善を願う事であり、自己中心性を否定する事である。その事によって、本当の意味で自己を生かす事が出来るようになる

のである。中国の思想家孔子は、仁の徳を重視した。仁とはまさに人を愛する事であり、それによってのみ世の中がおさまるとした。さらに仏陀の大切な教えの一つは慈悲である。慈悲とは、他者へ楽しみを与え苦しみを取り除くことであり、まさに愛であると言っているのである。そのみが、世の中を平和にするのである。このように東洋においても、愛が重要視されている事では変わらない。

ところで、愛と言ってもそこにはいくつかの段階があるようである。

◎利益の愛と快楽の愛↓利益の故に愛し合っている者は、相手の人間自身を愛しているのではない。相手から何か善いものが得られるという範囲において、相手を愛している。自分の利益を愛しているのであり、お互いに相手を利益をうむ手段として利用し合っているのである。快楽のために、愛し合っている人々の場合もこれと同じである。彼らは自分自身の快楽を愛し、相手の人間を自分になんらかの快楽を提供するかぎり、その存在を認めるにすぎない。利益ならびに快楽のために愛しあう愛は、不随的な愛にすぎない。自分の快楽もしくは、自分の利益のみにかかずらい相手の人間自身を、顧慮していないのである。しかし、利己的関心をすてて相手を「美しい肉体」とか、「有能な頭脳」として尊重したならば、これも本当の愛ではないのか。人間の事物化、人間の客体化と言うところに問題があるのであり、ここからして利益の愛、快楽の愛は真の愛ではないと言う事にもなるのではないか。

人間を、外在的な性質である財産とか地位とか生まれとかで、評価する事は人間に対する侮辱である。パスカルは言う。愛は本質の彼方にあるものを目指し、あらゆる判断の彼方に向かうものであるらしい。

◎善い人の愛↓善い人びとの間の愛こそ完全無欠である。善い人とは人間性を実現している人、自然に則して生きている人、真に自己自身である人のことである。善い人とは理性に従って生きている

人、つねに自由であり自律的であるような人のことである。善い人とは理性が質料的なものを統御し、その行動全体が恒常的な行為能力へと、形成された人のことである。善い人とは人間性を実現している人であり、善い人同士の愛とは相手的人格として認め、人格として尊重するという意味である。相手は自由な主体であり決して、手段として利用してはならない唯一者である。他者を人格として尊重すると同時に、自己もまた人格となり愛に値する者となる。彼は理性の働きの満たされた状態を保持しつつ、自己と他者の個的存在性を相互関係の場において実現する。

◎自己愛と隣人愛↓善い人のみが真の意味で自己を愛する人である。ある人が正しい行為、節度ある行為、有徳な行為に専念し自己自身のために善いことを保持しようと努めるならば、だれもその人を非難しないはずである。このような人こそ真の意味での自愛者である。彼は理性に従って生きる人であり、自己に最善最美のものを配する人である。理性そのものとなって生きる人は、もともと人間的な人間であり真に自己を愛する人である。ところで、隣人を愛しているならばその隣人に対して、われわれの抱く親愛の情は自己自身に対して、われわれの抱く感情とほとんど同一である。

アリストテレスによると、友たる条件には(1)相手のために善を願いかつ為す人、(2)相手が存在し生存することを相手自身のために願う人、(3)相手と一緒に時を過ごす人、(4)相手と同じことがらを選ぶ人、(5)相手とともに悲しみともに喜ぶ人の五つがあると云う事であるが、これらはそのまま自己に関わる人の条件でもあって、それは友たる条件の相手を自分と取り換えた形のものであると考える事が出来る。ここから隣人愛と、自己愛とは一致すると考えられるのである。

人間は、狭い意味での個であるかぎり欠如的狀態にある。人格としての一貫性を保持しつつ、同じく人格としての一貫性を保持する他者との間に同一性を実現することにより、その人間に自己存在根拠が与えられるのである。心理学では、このことを自己覚知と言うのである。愛とは、結局信じるこ

とであると言っているように思われるのである。

以上愛についていろいろと述べて来たが、要するに親愛の情が社会の中に浸透する事の大切さを、言っているだけなのである。

まとめ

社会的動物である人間は、共同体を維持発展させない限りよく生きてはゆけない。しかも共同体と言っても、今やそれはポリスや国家の枠を越えた国際社会、地球社会の段階にまで達している。地球の資源問題、環境問題、人口問題等々をみんなが考え、これを解決してゆかなくては人類が生きのびる事が出来ない状況に今やある。

アリストテレスによると、共同体維持のためには正義と親愛が必要である。正義のないところに共同体は維持されないのである。その際正義と言っても、今まで見て来たようにいろんな種類のものがあるが、それらを実現するために多くの人達が限らない努力をつみ重ねて来ている。政治や経済や法律の、各分野でもそれがなされている。ますます力がつみ重ねられることによって、地球全体に正義を実現してゆかなければいけない。勿論正義の持つ意味が、時代の動きの中で変わる事もあるであろう。新しい時代には新しい時代なりの内容も、もり込まれなければいけないのである。

正義と同時に親愛も大切である。それもより高い次元の親愛が望ましい。地球の中にその徳が実現される時、社会はすばらしいものになってゆく。ある意味では正義を超越した徳が親愛であると言っている。助け合う精神、これが本当の理想の社会を実現する鍵であると言っている。これがないと地球社会は成り立たないのである。

正義と親愛のもとに形成された社会の中で、私達は観想的な幸福な生活をめざさなければいけない。

決して物質的に豊かになることだけが、人間の幸福な生活ではあるまい。精神的な充実、質素な生活の中にこそ真の幸福がある。まさに、アリストテレスの言う観想的な生活である。これが究極の私達の幸福であり神を見るとき言う事でもある。

このような、アリストテレスの描いた人間の一つの在り方のモデルと言うものを、私達は多に参考にしなればいけないと思う。

さらに、今一つ付け加えたいのは、アリストテレスの学問の総合的なスケールの大きさである。今や学問と言うものは、さらに総合化されなければいけない。人間や社会のあり方を大きく広く深く考える場合、この総合化の仕事はますます大切になって来る。勿論、アリストテレスのように自然に関する学問も、その中に入らなければいけない。

アリストテレスは、総合的学者の典型である。そして、そもそも哲学とは何よりも総合化の試みそのものであるのではあるまいか。この部分についても、アリストテレスから学ぶ事が多いと思われるのである。

私達は、アリストテレスから学び取った力を、現代の社会に生きる力として、活用してゆきたいものである。

参考文献

山本光雄著「アリストテレス」岩波新書

今道友信著「アリストテレス」講談社

エミール・ブレイエ著渡辺義雄訳

「ギリシアの哲学」筑摩書房

※岩田靖夫著「アリストテレスの倫理思想」岩波書店

竹内靖雄著「経済倫理学のすすめ」中公新書

堀田彰著「アリストテレス」清水書院

山内得立著「ギリシアの哲学」V 弘文堂 アリストテレス全集 岩波書店

※ 13 「ニコマコス倫理学」加藤訳

14 「大道徳学・エウデモス倫理学」茂手木訳

15 「政治学・経済学」山本、村川訳

※印は特にお世話になりました。